その時であった。滝村の百姓某がとおりかかり、お前さまたちは侍の身でありながらオゝカミも切れないのかと言うが早いか、何十ぴきというオゝカミをたちまちのうちに切りすてたのである。

これを遠くで見ていた水戸藩の家老でオグリス十兵衛なる人物に、「これは素晴らしい人物だ。お前を水戸藩の侍として召しかかえたいので承知してもらいたい」と懇願されて、名前を小田桐新左義照と名のり、水戸藩の侍となったのである。

その後、小田桐家は水戸藩の家老となり、(一二家老の一人という)三代つかえたという。水戸藩にはこの小田桐家の墓が現存しているという。

滝部落西にある大隈山は、松平頼房公が鷹刈りをしたおり活躍した水戸藩士、大隈帯刀の名をとってつけたという。なお、小田桐家は滝部落の鈴木某家の先祖であると伝えている。

また、鷹刈りをしたという松平頼房公は、元禄年間、長沼藩ができたとき、陸奥国岩瀬郡及び常陸国内において三万石を与えられていた松平頼隆の父である。

(話者　江連　栄)

小田桐新左義照

《滝》

寛永の昔、水戸の領主松平頼房という方が滝部落西の「鹿の場」というところで、山狩りをした。その時、水戸様の家臣にて大隈帯刀という侍があり、古イノシシを退治したという。大隈山はこの侍の名を